

篠田久次郎録  
鹿兒島戦争記  
編三



A430  
2

鹿兒島戦争記三編

東京 篠田仙果録

徳も暴徒の巨魁たる西ヶ降盛相孫利秋  
篠原玉幹の二人の軍後陣定一交し

明治十年二月十八日

廉児清練より

押出しぬ

先陣の茶法

軍少将篠原玉幹

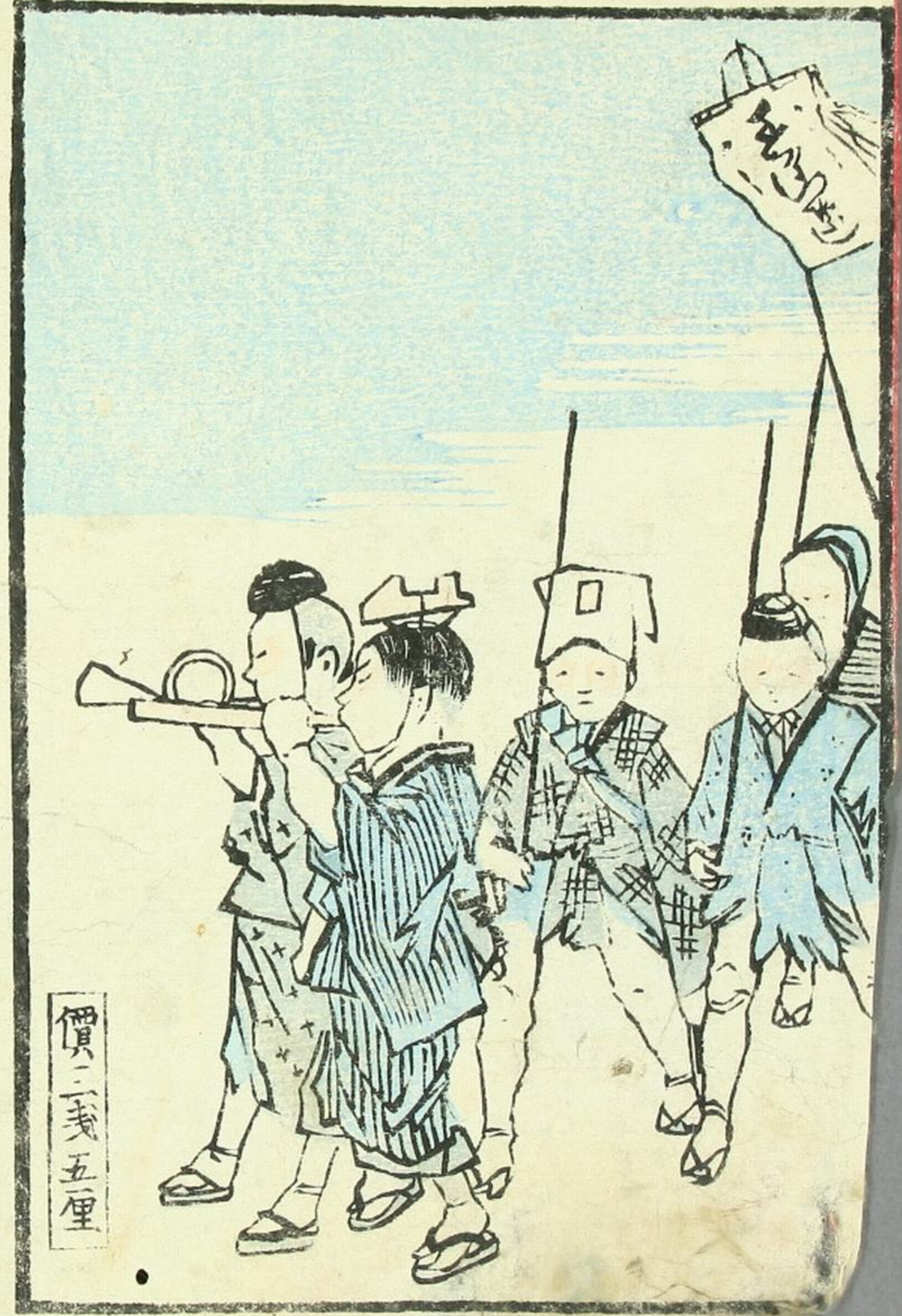
みいで并二陣の想

大將西ヶ降盛あつひ

村岡新八洲辺を照の友人の



鹿兒島三



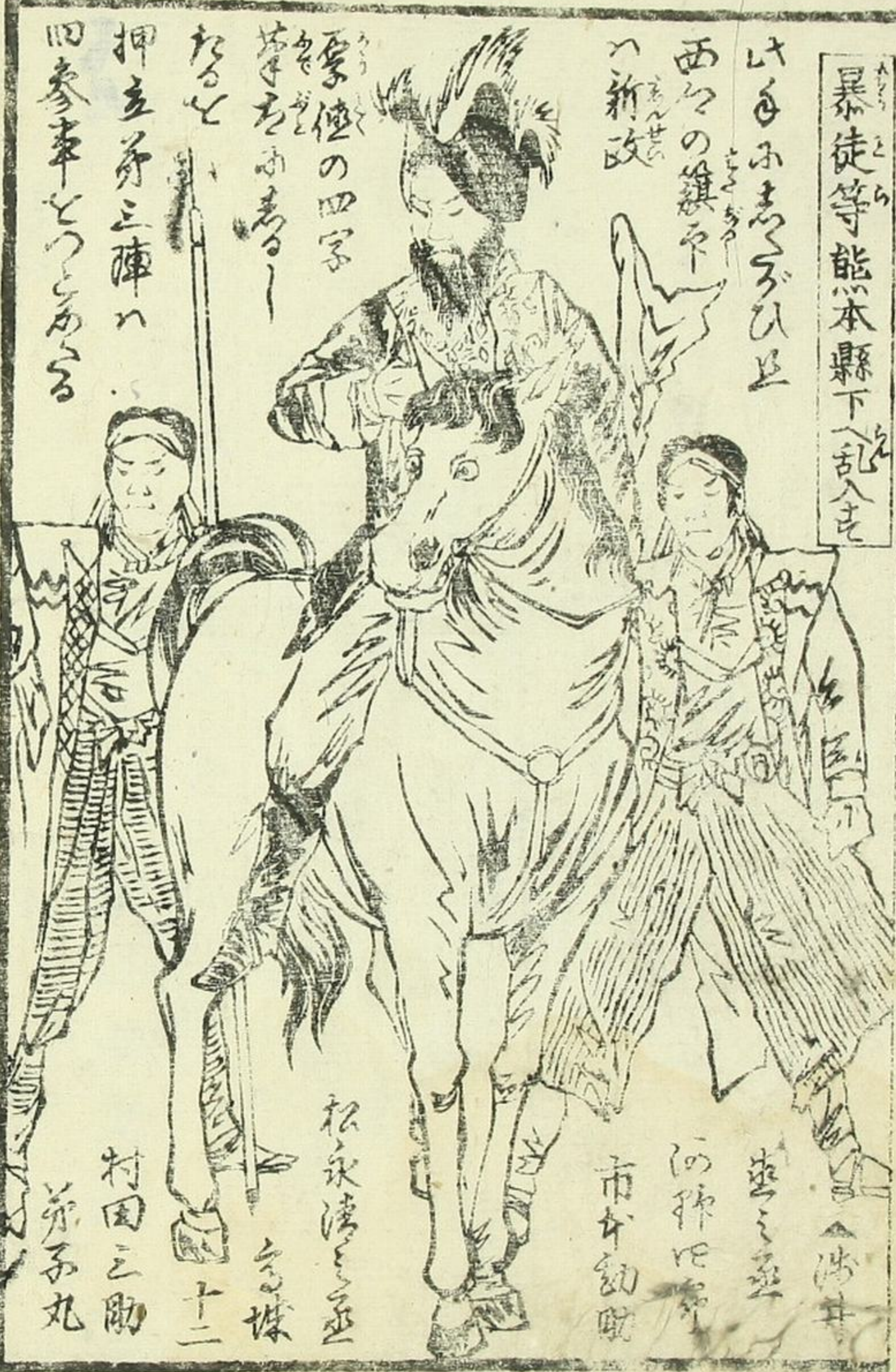
價二銭五厘

48-2972

暴徒等能本縣下へ乱入す

いふふあふふひは

西々の旗平  
の新政



厚徳の四字

押立舟三陣の

四参事とつとあふる

山内守

遠く

河津

市井

松永

十二

村田

并子丸

比上田舟とわ定め舟陣の

常陸軍少将柳新秋はして舟五陣の  
永山一団とく九城のあふり又控軍

# 新政厚徳

徳川幕府

小徳

以外大隊長と

して西々小平。別  
府新助。同九帝。遠兄十帝と



危助。山内守

左

東の

松永

山

小左

見

暴徒僭称の宿標を打

大将西郷隆盛本陣

八ヶ岳の中津城を以て伊東直三等をして惣勢一万四千余人二百人と  
 一隊にして又壯者六百人を統率して藤原徳と守らせしむ叔士族  
 或十人程を宿別元福の役として宿跡に出張させしむ人出  
 る車と中つけ通る隆盛が宿一の書付にて次第とある  
 らひ藤原徳は藤原政府大総督正三位陸軍大將西郷  
 隆盛本陣と書る標れをうけしむその外の者の宿跡の  
 大佐少佐あるといふ人名をとりしむ付たる宿跡とせ  
 おししむをうけたり供まき二編のちりめしむせしむ

藤原徳は藤原一徳家の義母がその宗門をひろめんが  
 ため各所へ統率を遣はしむるをまきしむ  
 互家をうらむるを力勉強  
 ありしむるに依するもの目と小  
 多死とんぬるとありしむ  
 生後等今度の暴挙と  
 多死おとと東海真宗の義正  
 大洲神徳ゆととありしむ十二人の  
 法ゆとちを學校へ引きおとせ  
 一問ふらちの通を番人と付しむ  
 一十八日二月又法ゆ建  
 とを引出ししむ小罵りしむ



イカニ冬と夏とこれおる  
傍とともいひ  
殊せうの義と  
結ぶ恩民と  
思ひ切らるる  
身を金縛と  
かきめ大集海と  
のそ炭女と電一豚牛  
鶴の差別ある英肉と  
倦るあふぬ新奥切色の  
軍神ふこれと備へ血まつり  
と執行せん



暴徒木法師と斬て血祭と

つらゆもこれいひのち  
原より新刀引物十人  
法沙のらひせうと  
らちあふ一川一  
とらんゆ血祭  
園子の六きさ  
ふと物とむり  
みごめ死らるる  
仕まつんとは物  
一説お大御鉄  
これい西々  
いとあふ格  
とあ



洋奥をつけしるふらりありの敷人敷を繰出せしめるの  
 捕押あくけりしる隊伍しりく列を守り肥後の風情  
 より八代協水暎た二夕舟小舟は八代を去り  
 一舟とあり、船が線下へ入せり  
 麻見徳線の幕法出陣小  
 のをそと一封の虫を出せり  
 その船名の公般  
 西の根跡 篠  
 系の子氏あを  
 是多くも出系  
 の上奏同  
 ありなる

廟堂あて議事御開



へ記事あり仍て  
 麻見徳を出陣  
 を起る起壯章  
 ともしめ清満とて  
 俣小出東すとのく柄けの交ありと  
 ○又一現小幕院二ふ人ありと  
 三方ありしれ一隊のま清海  
 一隊の犯前天  
 宮北一向けて  
 標出しり  
 とりり



○異説亦多人敷  
 一隊中線下小押切心

通りせんやと総座を  
合しうぶ改しと通りお  
あふびと善しに暴徒はすまはしと

西々氏の陰軍の  
大おありま  
大おの令ふ

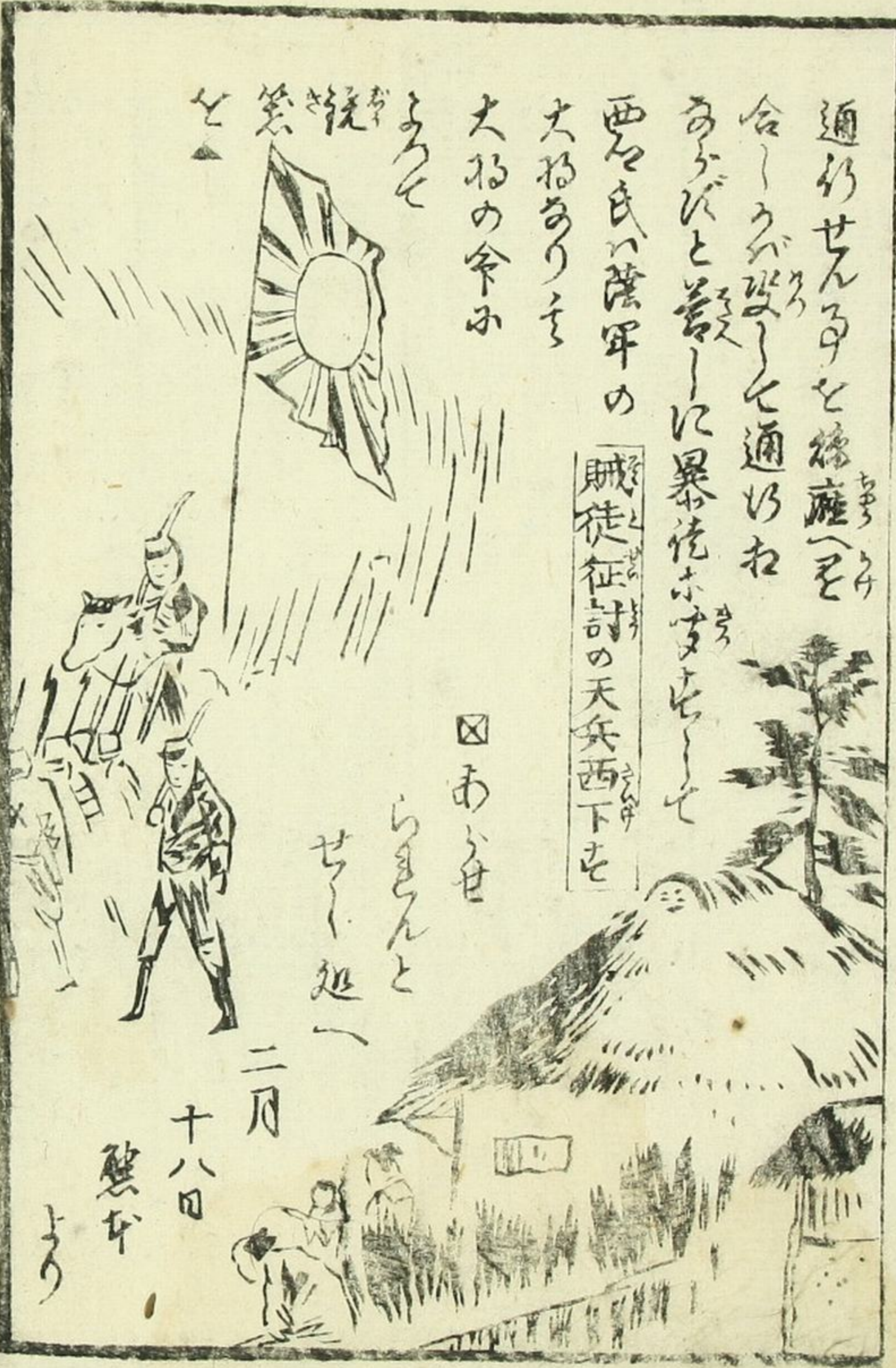
賊徒征討の天兵西下を

あふむ

らまん  
せし延一

二月  
十八日

熊  
より

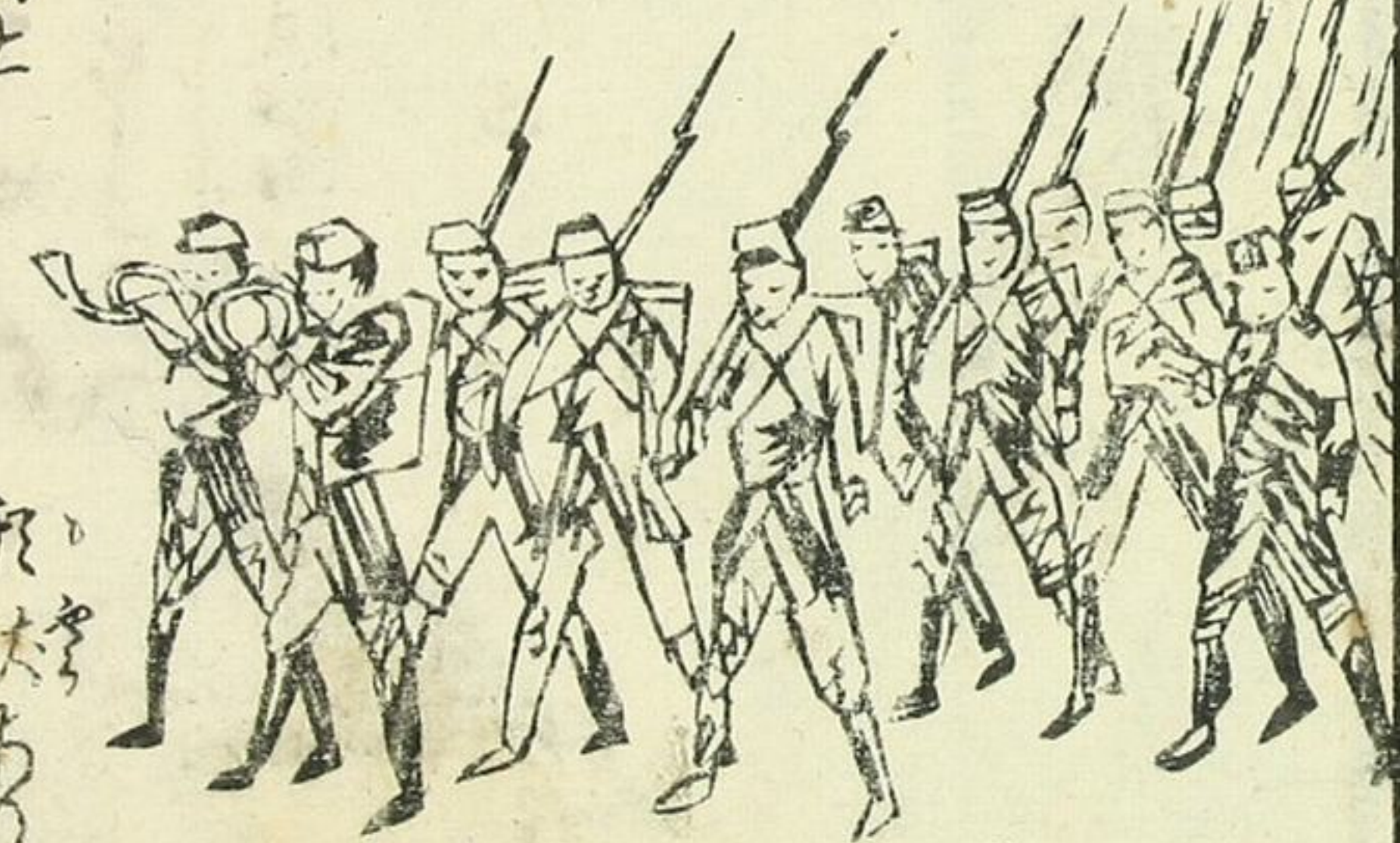


△推考草の  
おととととと

ハハハ

ようあり

さて又麻児清喜二品  
有柳川藏仁親王打系  
後宣とそくは是器徳と  
後流の系麻児清喜とさ  
つひさうとの義とて流船  
の治丸ふきり銀軍艦一隻  
あふびと騎兵ととととと  
あふびとに彼の地一と發



雷伝  
あて

麻児清  
の暴

水保  
の

人吉  
の

の

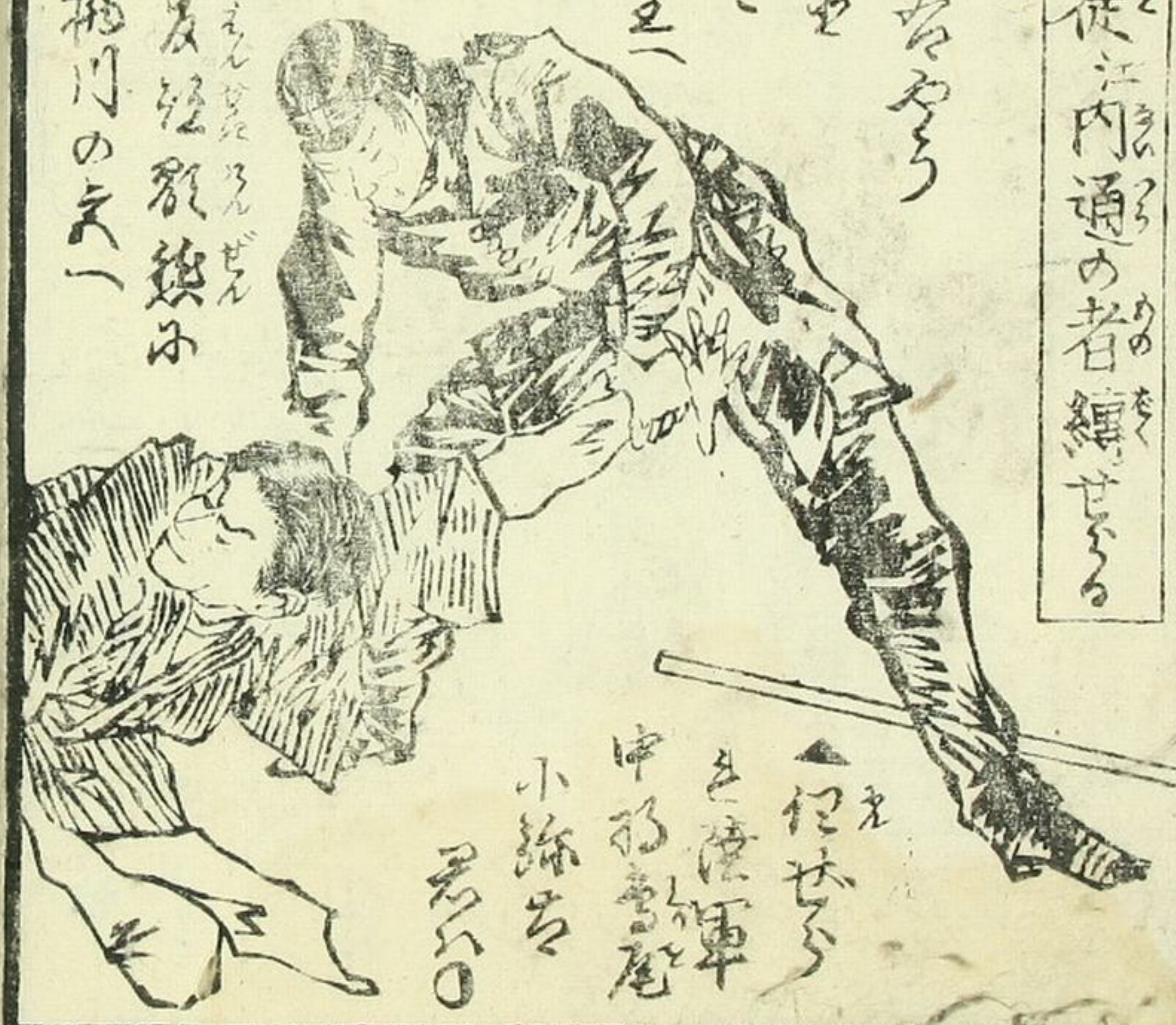
押出

飛状ありま  
高よりととと

同族士族の老  
態を録下一お紙

暴徒江内通の者縛せらる

此の急報ありは是の如く  
別荘にありては持重  
かこしとの振儀ありて  
再々以有栖川殿仁親王  
暴徒に伐徳督を令せ  
られ二月十九日西京  
行立所より麻兜宿  
録下暴徒去茶と  
推乃入態を録下八人及経教録下  
付征伐作せ出され有栖川の文一



仁世  
色徳軍  
中羽鳥尾  
小録  
君の

征伐総督作付り是の旨の如布告出  
同トく廿六日陸軍大將正五位右  
陸盛陸軍少将正五位相野  
利秋陸軍少将正五位藤原  
國幹左後統率の旨  
お遣せしは臨河海軍  
奉務不と録下中羽鳥尾  
又有栖川の文一參録  
として詳述三好の  
支海軍少将と副ら  
陸軍中羽鳥尾守朋海軍  
中羽鳥尾村純長君の參軍小



行在  
三属の軍人  
余は  
たり



○茲小麻兒時練士族  
 中山中友弟の跡を  
 あり一味の者十人  
 加らひひお何る暇を  
 のありつるう又一人  
 頼まれしや昨の治  
 九年の冬大久保  
 内勢つと圍殺せん  
 足行り〜がさるや  
 獲取して捕縛せらるる  
 懲役の處せらるる又麻兒時  
 の友弟中村義知作伯



▲不審の處  
 ある所の  
 探索と  
 とげ〜処

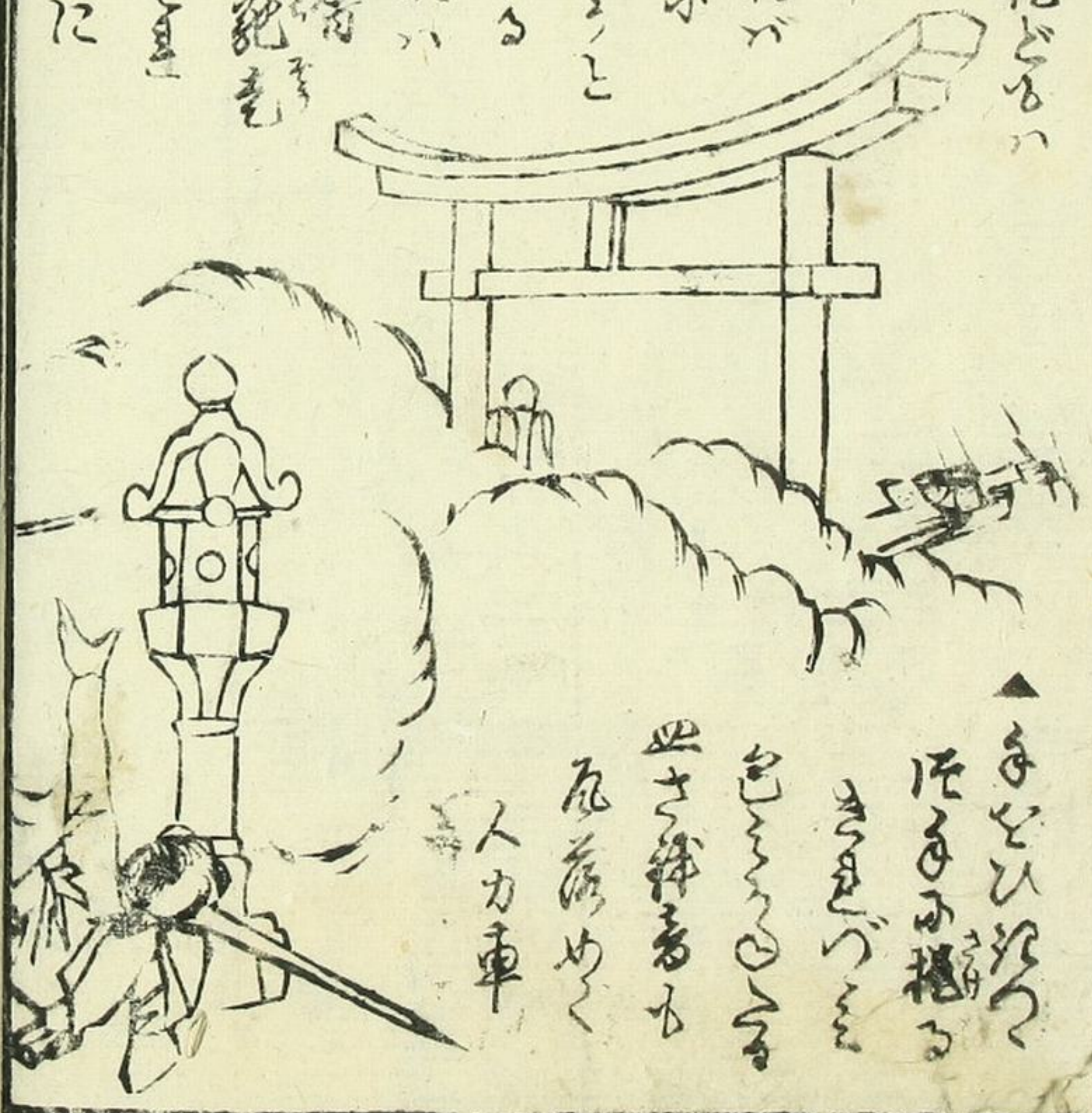
跡市表根の人太  
 義徳大海京尚義  
 外下人いふれ由  
 敵を殺せし縁一  
 拘引〜獄〜が  
 今更の暴徒一味のよ  
 又是も麻兒時士族吉川  
 以帝と云ふ者いふ大久保  
 内勢つと勅め流り〜が  
 身おあ〜く暇とまら〜が  
 漂流せ〜が



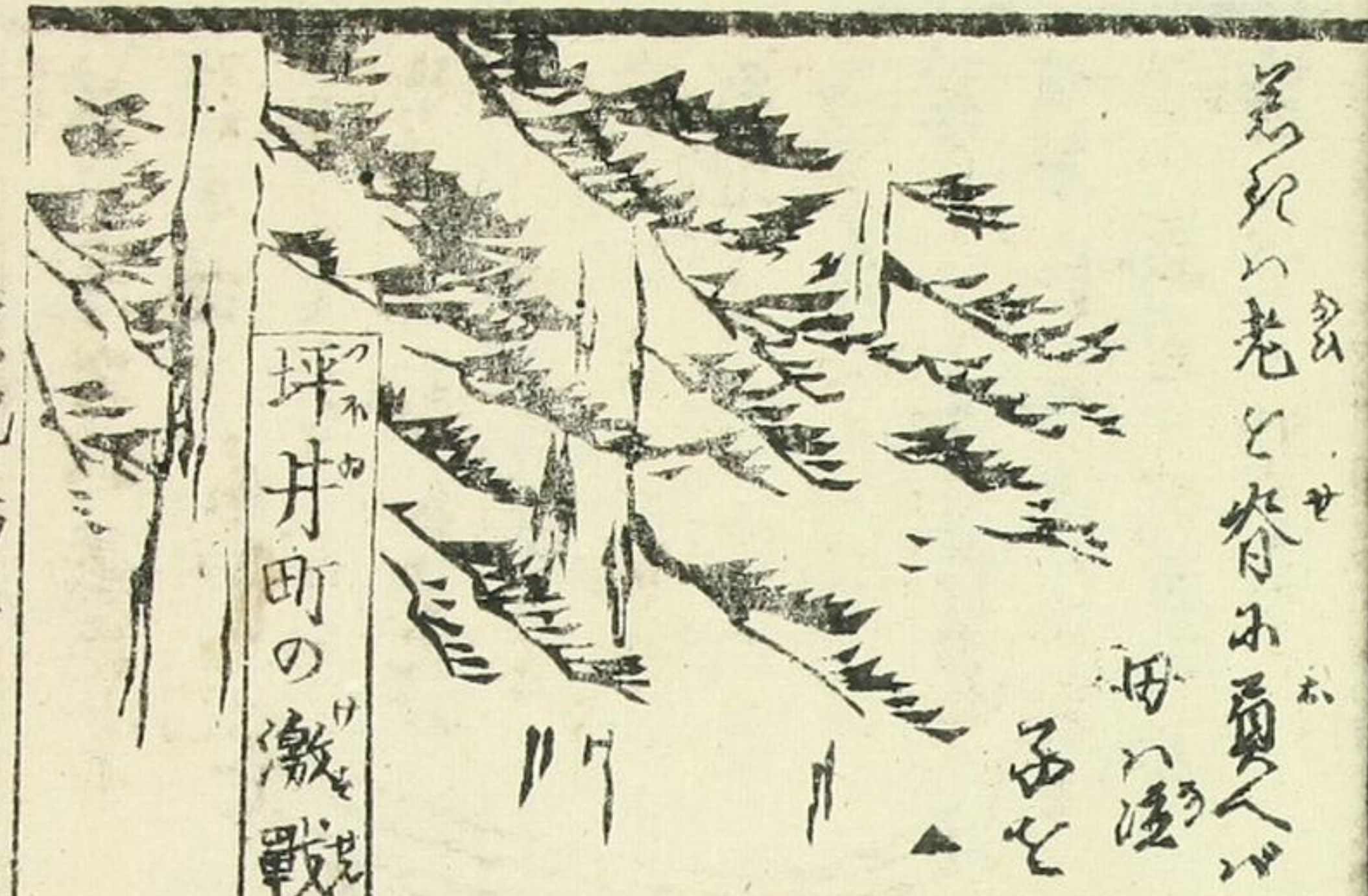
●暴徒〜  
 加搦  
 及び〜  
 つ〜

熊本縣下の人民諸方へ立退

愼て為り清暴徒ども  
 態を疎下へあ  
 多色あるそのあ  
 新くより報知あれハ  
 疎下若ども遊り子  
 市外ふまの死ゆと  
 縁底より帝達ある  
 何を果てより風後ハ  
 あり人民者志意  
 つれて鉄砲玉の死  
 との難義子万そ  
 途出せといふまに



▲手とひたつ  
 所子小橋  
 色々々々々  
 世々々々々  
 瓦落め  
 人力車



坪井町の激戦

是れは老と脊小負人  
 母の泣き  
 子と



豊元集三

その混雑大くあるは  
 先陣後隊兵士幹事の  
 無ハ謀下る道く  
 進まぬ安政橋と  
 らち海り千五畑  
 系町よりを物  
 七二のちよつていふ  
 いかに口小向つせ一むい自ら  
 指揮して陣井町と  
 ぬらうけらう

官軍敵陣と見透

鹿兒島戦争記三編終



明治十年二月

著者 佐藤田入次郎

同大徳寺小三郎

出版人 杉浦朝次郎

藤田久次郎  
鹿兒島戦争記  
編四



# 鹿兒島

## 戦争記

の海

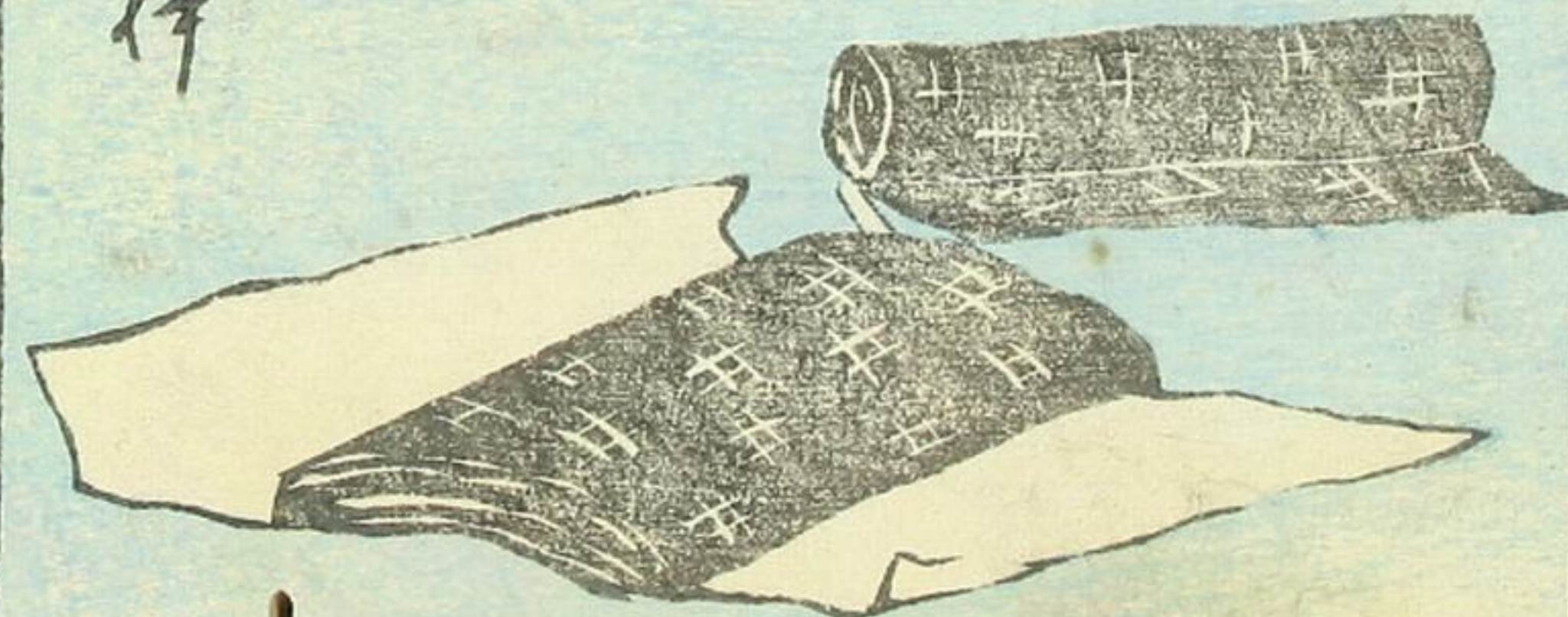
以條田仙果録

方遠舎儀祝画

價三匁五厘

常世本

素梓



# 鹿兒島戦争記四編

東京

篠田仙果録

二月二十六日西系行在所より以達し小田原軍より西三位  
西の降盛陸軍少将正五位桐野利秋陸軍少将正五位  
篠原五郎安徳護国  
作せ出されまゝの麻兜  
袴袴下道徳征討おかせ  
出され小田原道  
徳自茲各地方へ  
逃

逃



鹿兒島

或ハ濫竽も被<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>て由<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>り山<sup>ノ</sup>茶  
 後内要衝の地方ハ勿<sup>レ</sup>論出入  
 船等取<sup>レ</sup>締<sup>ル</sup>お<sup>レ</sup>て嚴密小  
 捜索と遂<sup>ニ</sup>捕縛被<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>くとの  
 以<sup>テ</sup>達<sup>ス</sup>し小付<sup>ノ</sup>被<sup>レ</sup>縛<sup>ル</sup>下<sup>ニ</sup>とも暴  
 徒の探索のときびく<sup>レ</sup>紀<sup>ノ</sup>花  
 長崎より東南<sup>ニ</sup>ある日見  
 津より南<sup>ニ</sup>の海<sup>ノ</sup>岩<sup>ノ</sup>本浦  
 疾<sup>ク</sup>ま<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>麻<sup>ノ</sup>思<sup>ノ</sup>人  
 銃<sup>ヲ</sup>携<sup>シ</sup>上<sup>ニ</sup>陸<sup>セ</sup>し<sup>テ</sup>  
 十<sup>四</sup>人捕<sup>縛</sup>あり<sup>ま</sup>す  
 士<sup>族</sup>牟<sup>田</sup>麻<sup>丸</sup>等<sup>も</sup>縛<sup>せ</sup>



られし者どもの内<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>  
 四<sup>名</sup>佐<sup>加</sup>美<sup>孫</sup>の士<sup>族</sup>武<sup>人</sup>山<sup>形</sup>  
 孫<sup>士</sup>族<sup>並</sup>人<sup>族</sup>賀<sup>孫</sup>士<sup>族</sup>並<sup>人</sup>  
 麻<sup>丸</sup>思<sup>ノ</sup>の士<sup>族</sup>もあ<sup>り</sup>て<sup>レ</sup>北<sup>東</sup>の  
 内<sup>ニ</sup>小<sup>幅</sup>文<sup>を</sup>所<sup>持</sup>せ<sup>し</sup>者<sup>あり</sup>  
 あり<sup>ま</sup>す○さ<sup>に</sup>薩<sup>州</sup>麻<sup>丸</sup>思<sup>ノ</sup>  
 より各<sup>所</sup>より出<sup>る</sup>た<sup>り</sup>  
 あれど勿<sup>レ</sup>論<sup>も</sup>  
 死<sup>せ</sup>し如<sup>く</sup>遠<sup>く</sup>  
 の地<sup>ニ</sup>あ<sup>る</sup>事<sup>也</sup>  
 あり<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>る<sup>る</sup>  
 道<sup>ト</sup>が<sup>し</sup>され<sup>ば</sup>百<sup>事</sup>の<sup>一</sup>

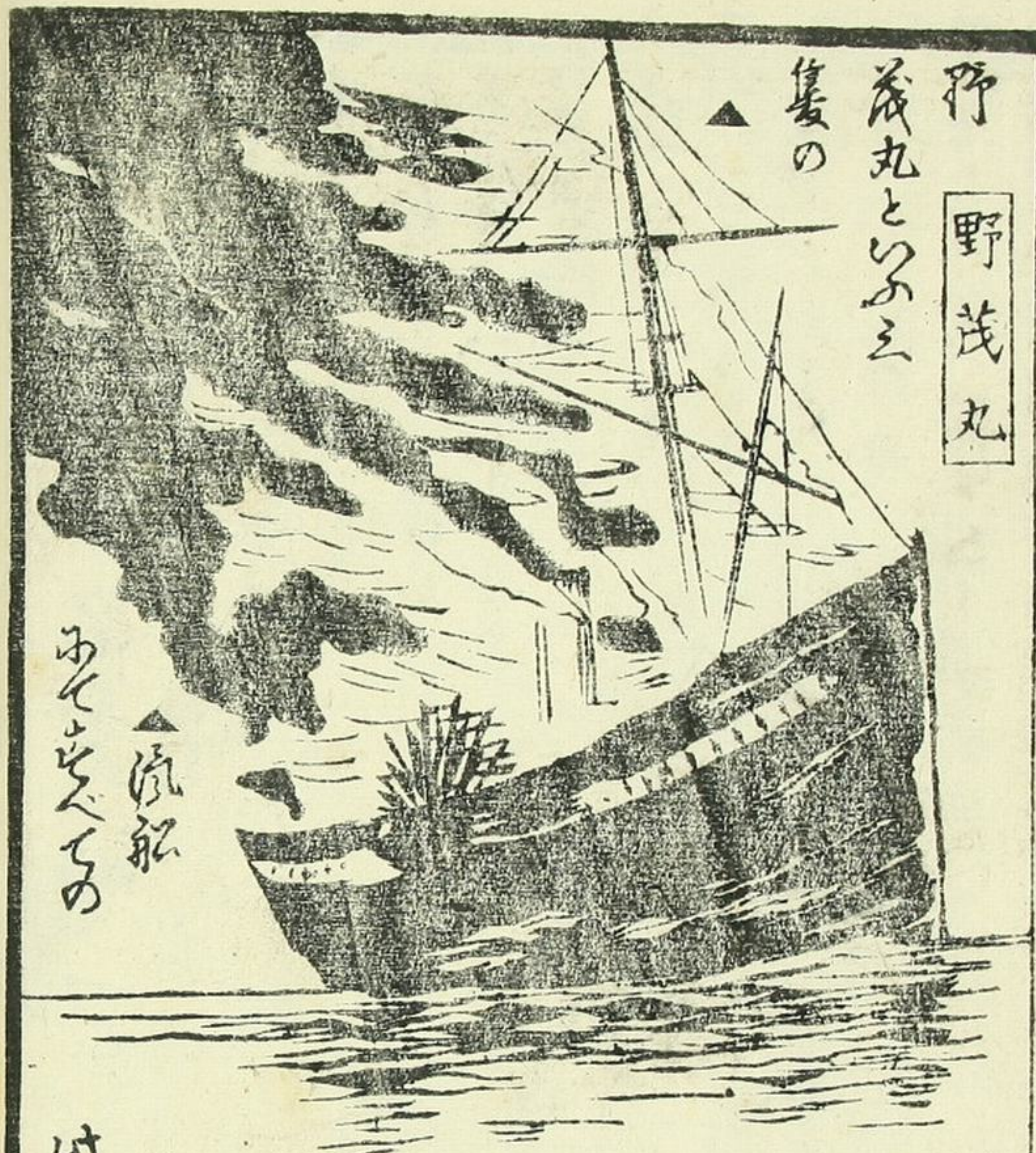


× あり<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>る<sup>る</sup>  
 暴<sup>徒</sup>の各<sup>所</sup>下<sup>ニ</sup>  
 迎<sup>接</sup>丸<sup>舞</sup>等<sup>也</sup>

× 船<sup>ヲ</sup>運<sup>送</sup>  
 候<sup>す</sup>

野茂丸といふ三

隻の



流船  
あてとての

運送のつめ

のそとに麻兜

増ふりたる海

流犯茶の全

天よま地よ

日よ久押へ

かゝるゝをり

あふかひく

海軍省の

統讓艦もく

け海上をくさ

物品を運送

せりあふんづ

運陽丸への

大船十二門

強茶を積る

とつとに麻兜

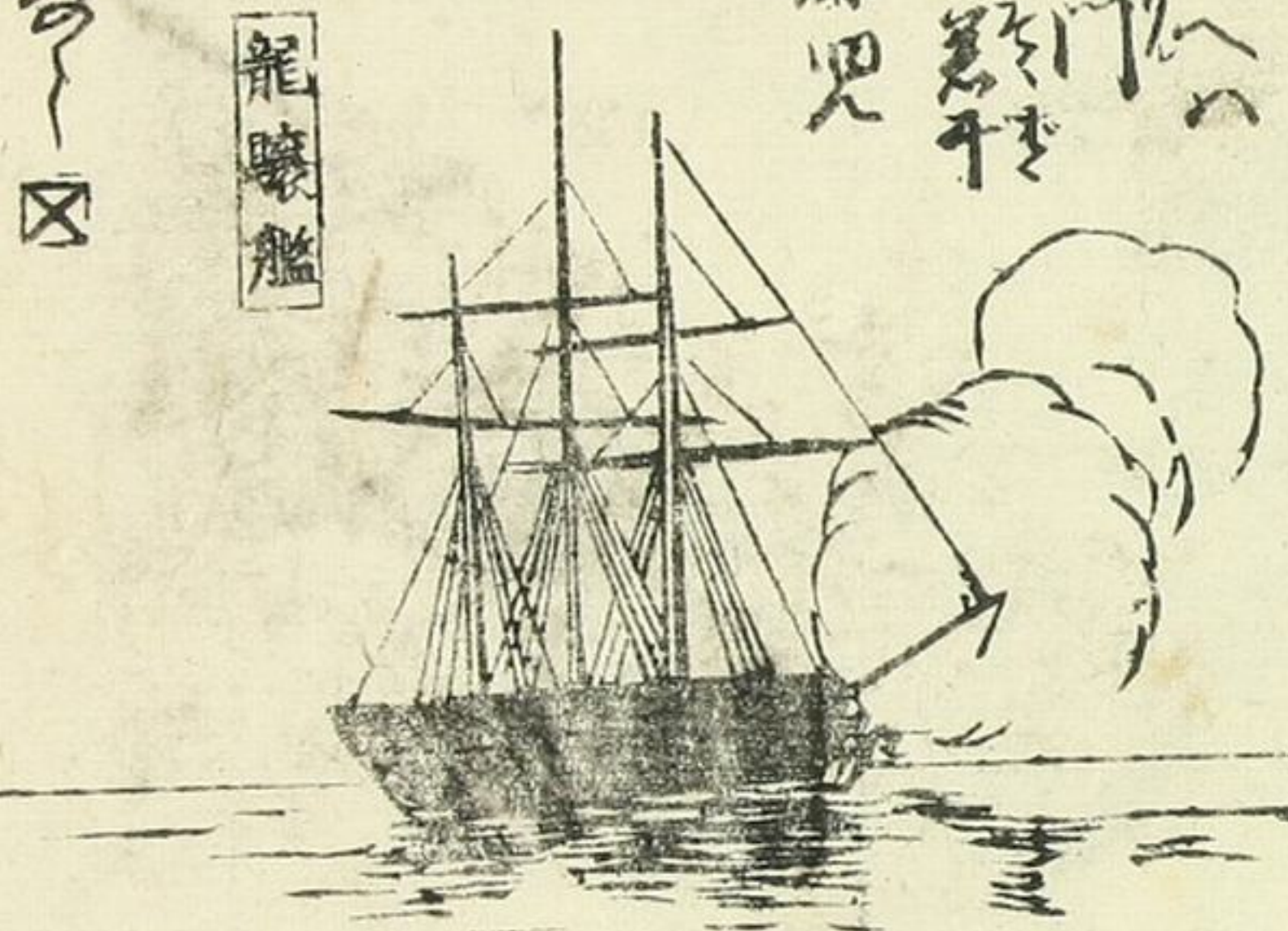
徳港を出帆

犯後のろふ

八代まのり

大砲をどけん

龍驤艦



たりの麻兜は

の船とをりけ

くは船をあげ

車と橋ト

運陽丸を

送るけたり

徳島波の

運陽丸の中

あふ船士水交

のそとに麻兜

松讓監ふ  
宋奪之瓜  
坪井町激戦



海軍士友勇とてとて  
強き一城糸糸丸  
野糸丸  
とも  
糸糸丸  
糸糸丸  
運轉  
の機軸と  
そぐすおの

▲先陣孫系本輪  
大者小者そりなる  
味方の人々  
ゆ一城の天下のを  
まれば勝業のた  
うひなるは今日  
先陣小機も  
目らるる  
糸糸丸  
あまふ△

用ふまざるやうに  
野糸丸の焼きとせし  
その後八代の  
海上の海軍の

篠原國幹

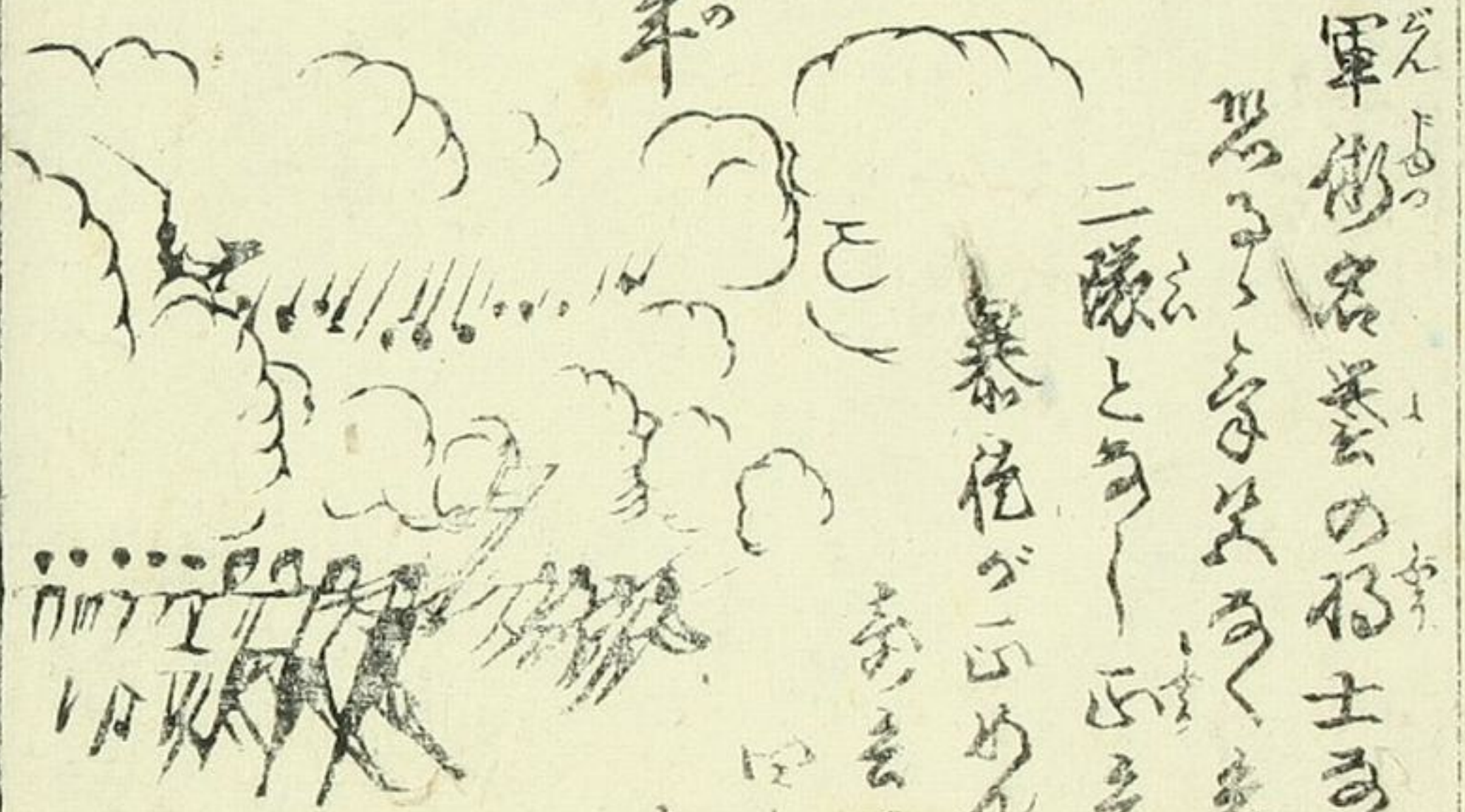
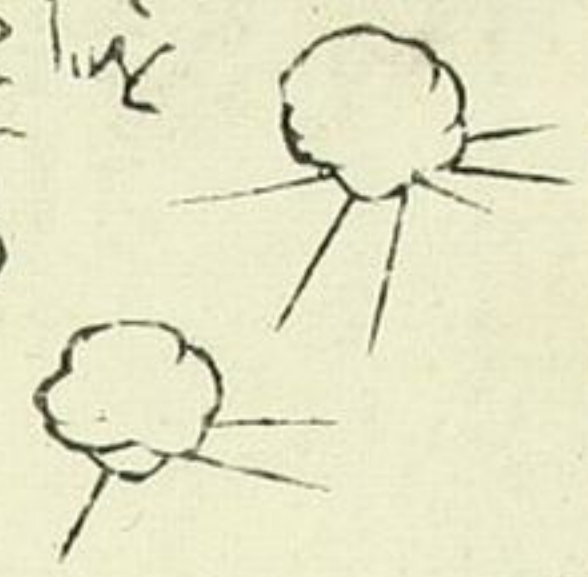
○さて又然や  
の味りある  
坪井町へ押  
ふせー異色位の▲



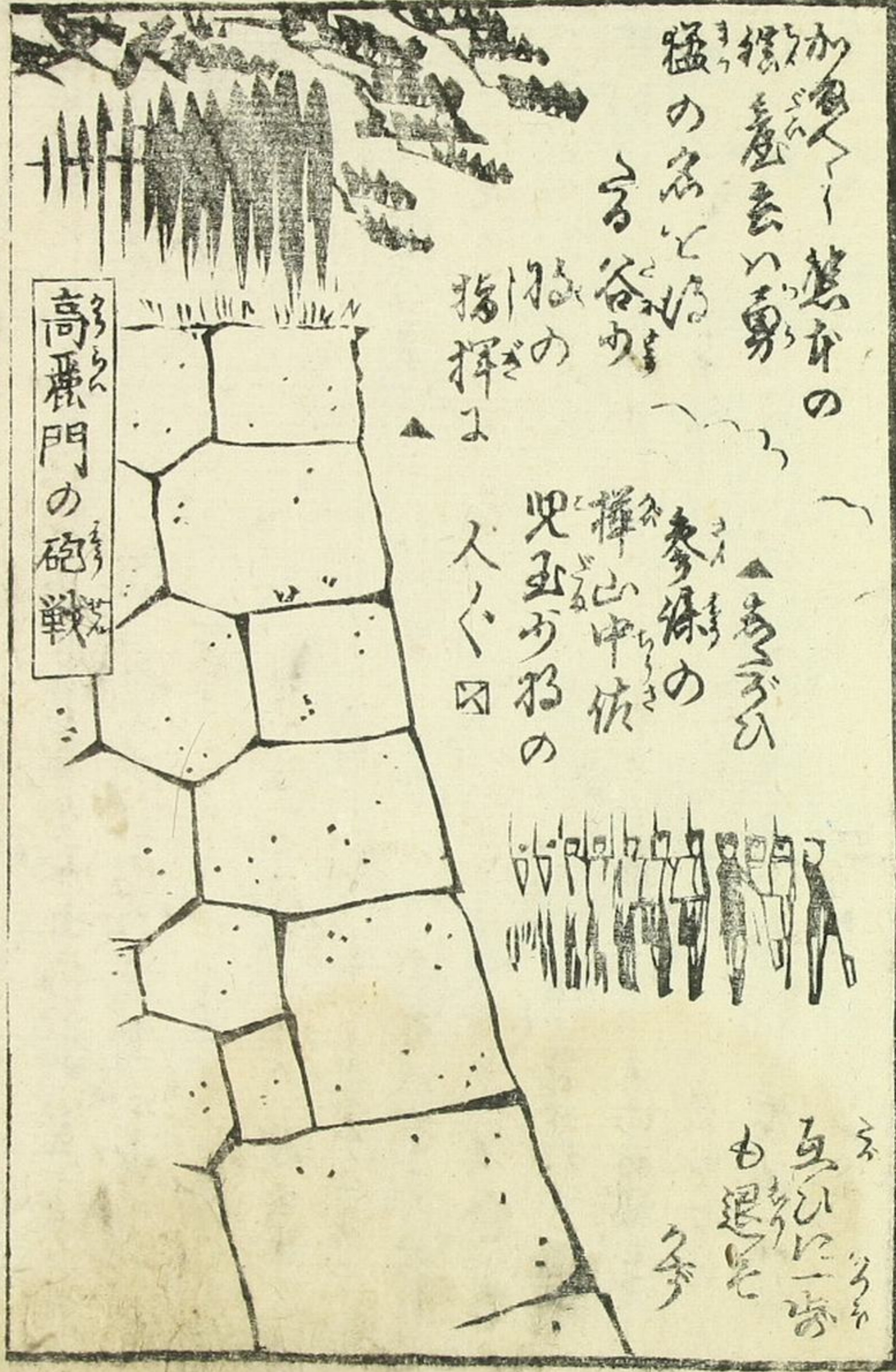
▲後代  
まきの  
笑以財有り  
合戦の形く  
たらののぞ  
あつた  
自ら陣取  
不之成  
連あ等  
たる



解とひく  
 めか  
 けと激  
 かく令  
 下せむたする  
 どののく救とせぬ  
 倉児流名代の事年  
 政初るその機力ひ  
 被炸のこもくた  
 ひと探とおくうる  
 ちうれどのまち



軍砲名義の福士あれた  
 二隊とあり正まの  
 暴徒がふめん  
 砲後すさ  
 の後係  
 ちと  
 前渡た  
 に向か

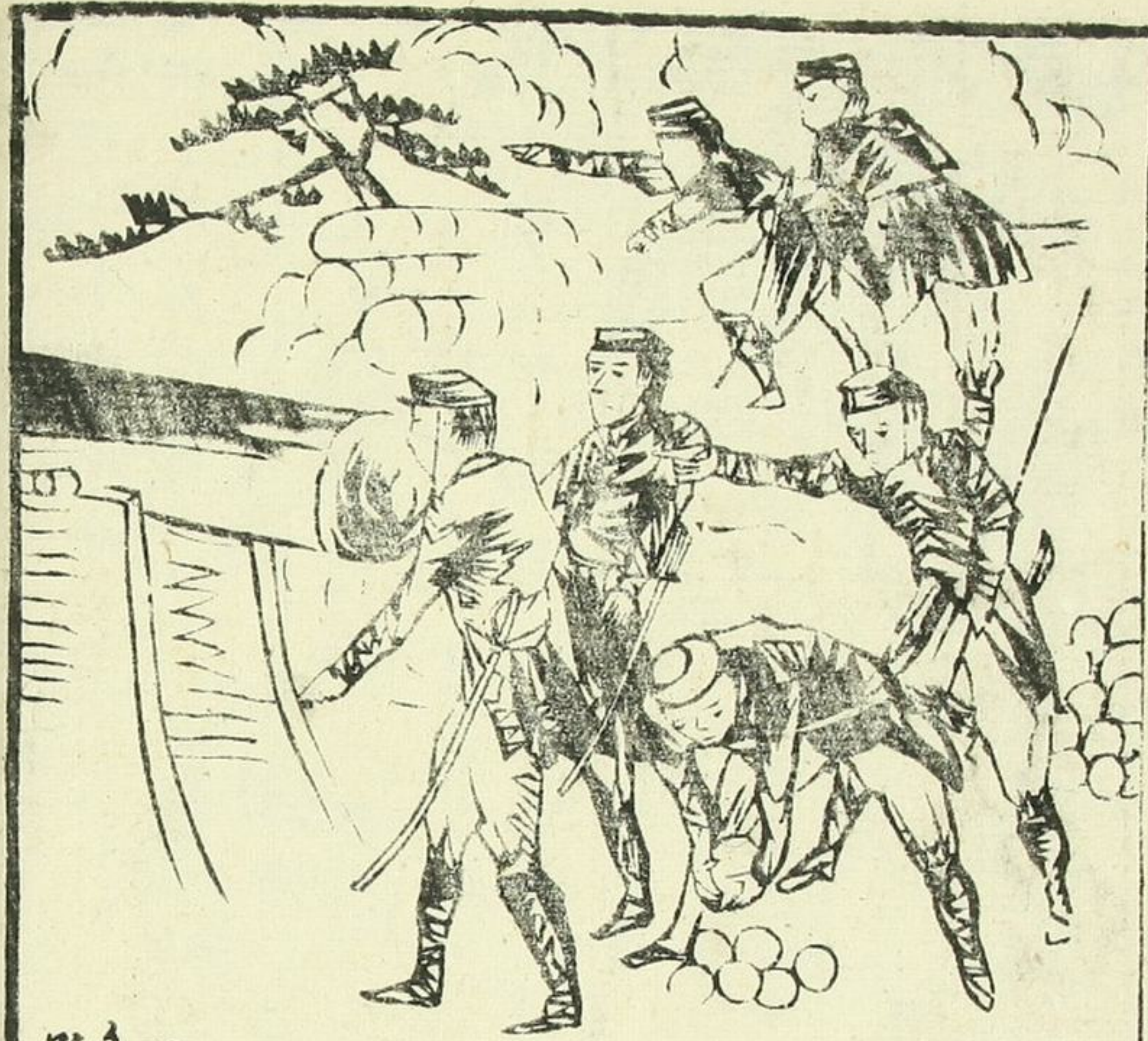


高瀬門の砲戦

か  
 猛の  
 谷  
 指  
 入

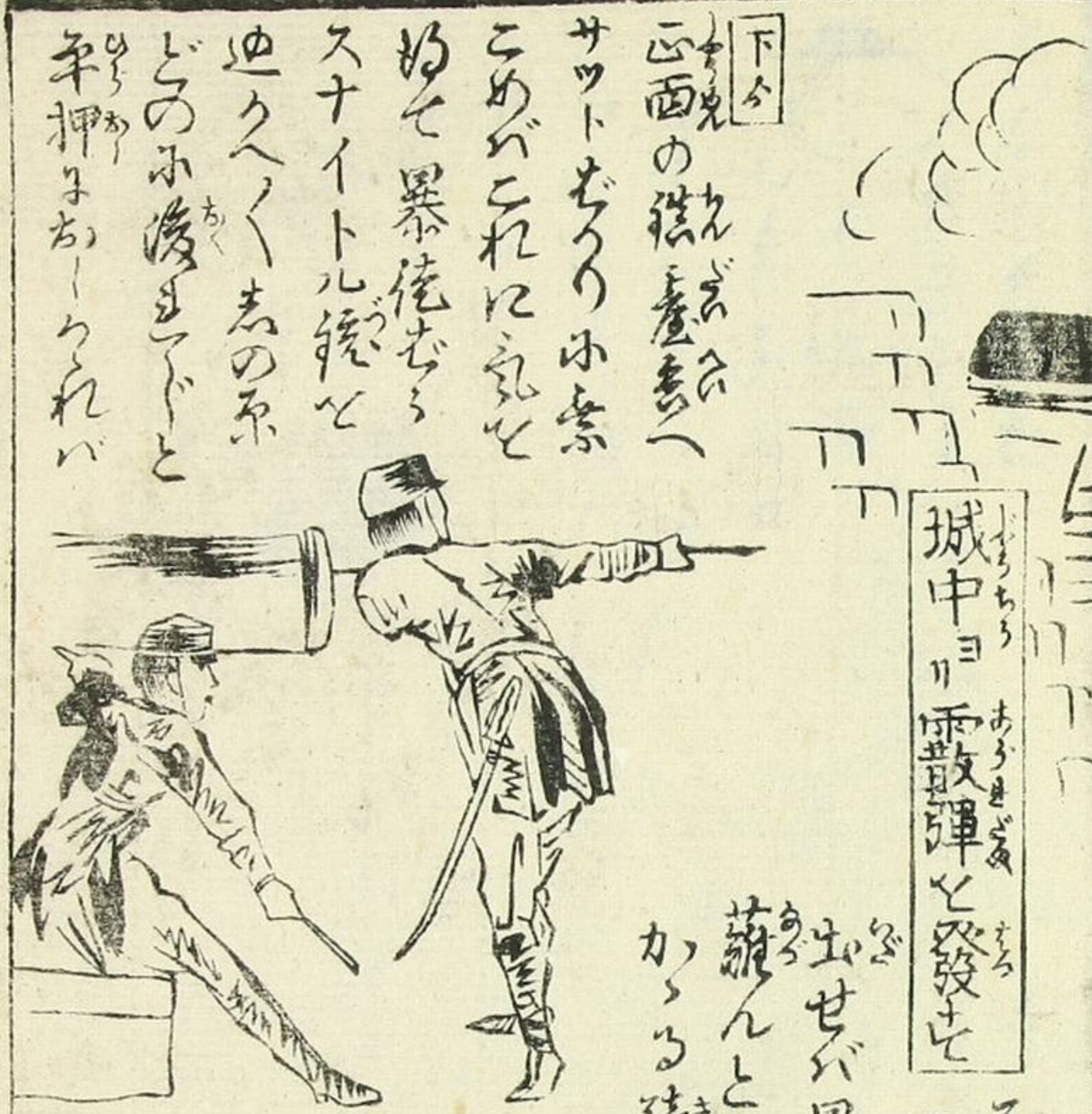
参  
 揮  
 兜  
 人

互  
 由  
 久



敵我殺刺あつたべと  
 つくも傍故のまご  
 決せざりくが暴徒  
 の方より四十人程  
 大刀とひらめく  
 花まる経丸をか  
 らせ程をその日  
 のと小とひ入を二を  
 と小程をより程が  
 その激速に候へ  
 孫を隊いとれどさる  
 近ちくえんと号令し

城中ヨリ  
 散弾と發して



下分  
 正面の程を  
 サツトむろり小宗  
 こめがこれに氣を  
 ぬて暴徒を  
 スナイトル銃を  
 迎久く志の系  
 どの小後までと  
 平押しあつたれば

出せば暴徒いるのありと  
 薩んと身を志づめて打て  
 かつ騎を馬を程  
 るの程とあつたつ  
 一と發あつたつてのり

退る返つて  
 たりは條系  
 長の程は  
 小柄右ま  
 銀を打つて上へ

熊手云々  
退くともな

く  
る藤門まで

来りしと

け新を大

あれと筒先と細代

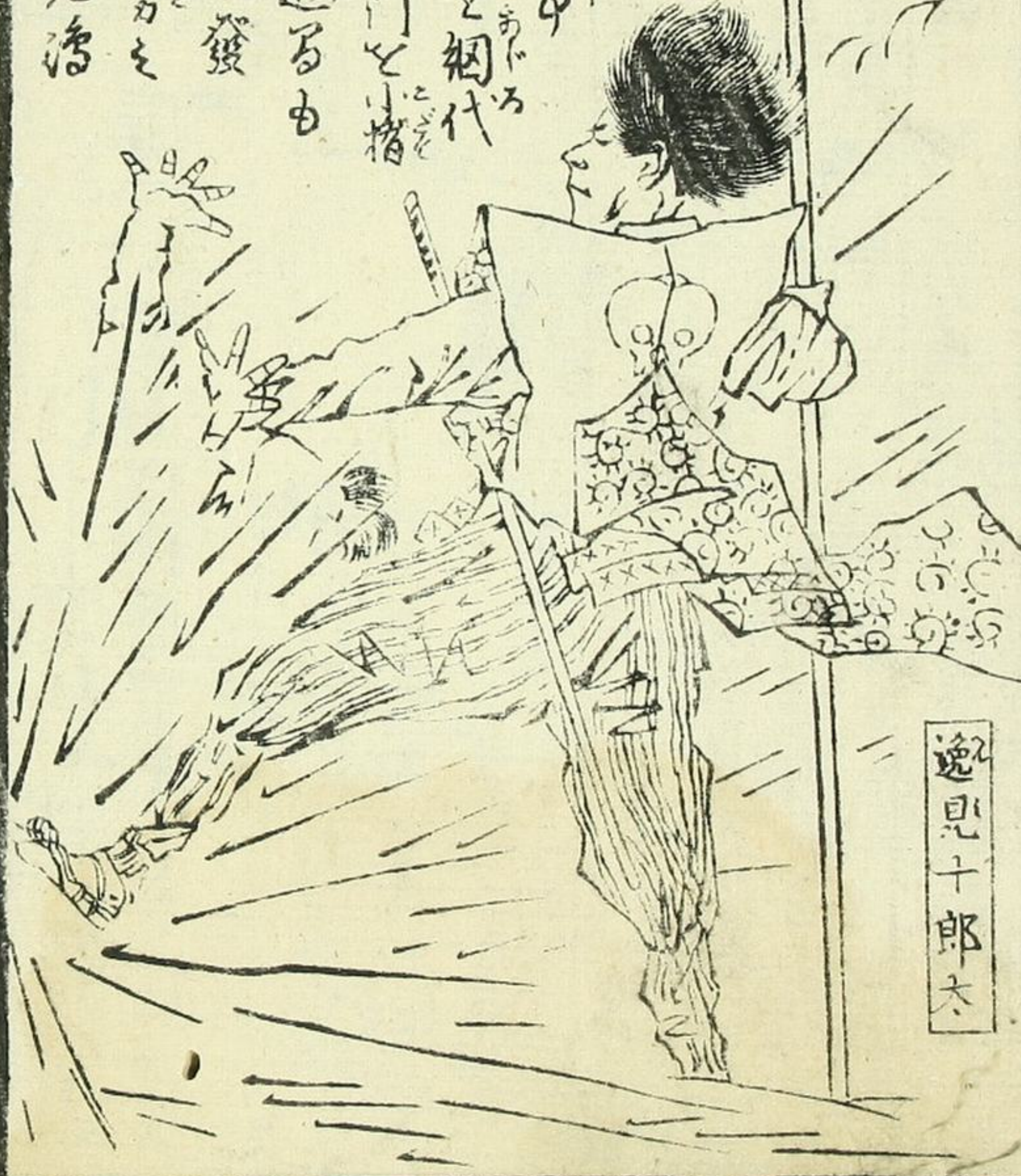
小銀と藤門と小指

小より透る由

あき激發

あせつ勇を

小いさし藤門活



逸見十郎六

勢も退之がう

ええ小けり

相懸有の珠と

のるい小山の上

ある城あれが

勢をるあき

引寄 あれ藤下

小え下 一肉割

とをう かひて

そのへ

手敷は深丸の

大砲とお知たり

大砲とお知たり

霰弾丸破烈す



彈丸へ重中と重丸の二つ  
 藤原清盛の妻正室一  
 地ひびたあして藤下  
 生六深丸はたあむわ  
 破想ろく中ある  
 小艇ハ八方へ森のどく  
 花のあぞをねへと登る  
 同男もあく候けい  
 うち出しくわばさか  
 暴徒も壁易るく多  
 死人のあさうらね  
 入にまをまを纏めて引揚る



清輝艦の人々敵地を伺



〇この小又長崎近海を固める  
 清輝艦小艇一と二人の天馬  
 の形状をえんと二月廿二日午後  
 五時正に小艇より獨舟と船一  
 小笠原中尉坂本少将水去  
 十二名乗り入りいそくと  
 船とよせ圍死を言以上陸一  
 淡辺つらひ一あむじが暴徒  
 加こあも兼てありその後  
 あり一とんえ隣一ある小笠の  
 うちあをの島の壁の考と  
 在小け不彼起より暴徒を



殺十人あがれぬ  
 己はくく強う  
 綱へうりくく  
 同若ともそれ  
 付ぬれといふ  
 まふ十四人を  
 退れ巻八方より  
 付てくるをいむ  
 今ハ一巻無命前  
 あり後ろを防ぎ  
 少阿のるご戦ひ  
 多勢ふ不勝けい難く



〇若小  
 紀後の  
 玉乃  
 八代ハ  
 海思  
 清りのの  
 勢はあれハ

一方の活路をひらいて  
 小笠原中尉水交四人の  
 幸しくもその清輝艦之  
 度りるが坂本中尉の爲に  
 と勇ひ候へ  
 の山一ツ付  
 のかり山をつつみて  
 逃れられどは方さうか  
 おろろ水交八名も  
 同かく行来さうあふ  
 獨りの暴徒の爲に大勢ひ  
 ぬられさりとあん

清輝艦の人々決戦

小笠原中尉

坂本少尉



暴徒の勢ハ必死  
 ありと候なり  
 結巻  
 谷隈軍  
 お好より  
 八代博内  
 ありか市中と  
 焼もくんと

指揮ありければ十九日必用の地と  
 焼取ひぬ相八代の外主人の居る地  
 ろれべ一層強さを着せよあり  
 港の内外の軍艦ふて固め強  
 陸軍の急と配り市中へ東京  
 あり強張の巡査を急と  
 携へ巡査を強するあり  
 志々廿一日暴  
 佐押よせあり  
 戦場と聞きあり  
 ○再び從容陸軍あり  
 鹿兒島戦争記四編終



▲指揮せざるは  
 本謀の八代  
 地雷火と  
 仕る  
 故のよせ  
 ると結  
 あり

明治十年十二月

著者 藤田久

同大島寺小

出版人 杉浦朝次郎



大友朝次郎